series　Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第三部

第十五章

Princes Highway

峯村　明

リ・コンストラクション

登場人物
１５・Princes Highway
173.
174.
175.
176.
177.
178.
179.
180.
181.
あとがき
奥付

登場人物

桧山 健	27歳の実業家
ひろ	健の妻
真	健・ひろ夫妻の子
エドミール・アウレア	ポルタアウレア公国の皇太子
A,V.ラウレンスⅢ	H&L財団代表

１５・Princes Highway

173.

　真は週に二回、ピアノの練習に通うようになった。
「ピアノ弾きたい。ね、パパ、おねがい」なんて、つぶらな瞳をうるうるされたら、むげにノーとは言えない。

　レッスンの謝礼は如何ほど、とバイスロイ先生に問うてみる。こいつのことだから一回1000ドル（約100,000円）くらいのことを言うのではないかと。すると、「そんなものはいらない」、という。

「本気か？」
「私の方が真に教えたいのだ。教えさせてくれてありがとう料を払いたいくらいだ」
「なんだそれ？」
「きみには真の音楽の才能がわからんのか」
「よくわからん。が、条件がある。真に養子云々、おとうさま云々、口にするのはやめてくれ。なにか吹き込んだとわかったら、おたくにも、真にも、ピアノは諦めてもらう」
「わかった。二度と口にしない。誓ってもいい」

　バイスロイがこうもあっさりと条件を飲むとは意外だった。よほど真の才能がお気に召したのだろう。ご存知の方にも、そうでない方にも示しておきたいが、彼はかつて『智と美の殿堂』と称された世界最高の芸術の都であらゆる芸術に精通した経験の持ち主である。その審美眼はもとより、本人も歌って踊って芝居もできた。楽器の演奏は言うまでもなかった。絵も描けば彫刻もした。芸術に関しては、バイスロイの魂は非常な経験を積んでいた。そういう事実……あるいは本性……を知っているからこそ――どれが演技かわからない反面――ある意味安心して真を託してもいいと思ったのだった。

　本人が言う通り、真を養子云々の話は最初だけで、あとはすっかり影をひそめた。それどころか、「私としたことが軽率であった。許してくれたまえ」と謝ってきたのだ。それはそれで、なにか思惑があるのではないかと健はひそかに勘ぐったものだった。

真が三歳の時から、健は時間を作ってはテニスを教えていた。教えたというより、軽いラケットを持たせ、ゴムボールでいっしょに遊んでいた。一年も経つと公営のコートへ連れていき、ほかの子の練習の様子を眺め、コートの広さやネットの高さを体感させた。パパといっしょなのが嬉しいのかテニスが気に入ったのか。そこまではわからなかったけれども、真は熱心だった。

そんなことをしているうちに、さらに一年が経ち、五歳になり幼稚園年長になると、準備教育というのが始まってしまう。オーストラリアでは小学校入学の一年前からの準備教育は、義務教育なのだった。
いつまでもいっしょにいられるような気がしていたが、なんだか淋しいなあ、なんて父親の感慨にふけったばかりだった。しかし、いずれは信用のおけるテニススクールに任せるつもりだった。運よく、目と鼻の先にスクールがある。世界ランカーを何人か輩出している、いわゆる名門である。競争率は高そうだが、いざとなったらカネの力でなんとかしてやろう、なんならスクールごと買い取ってやる、と、健は親バカなことを企んでいた。

火曜日と木曜日の午後、毎回同じ時間に迎えがやってきて、真を連れて行き、だいたい同じ時間に帰ってくる。うきうきと出かけて行き、満ち足りて帰ってくる。真はピアノに夢中だった。おかげで、テニスの時間は減った。
それにしても、息子にピアノの才能があったとは……
真の祖母、健の母親ソフィアはピアノの名手だったというから、ひょっとしたら健自身にも才はあったのかもしれないが、あいにく自身で演奏するという環境には程遠く、そういう欲求を覚えたこともなかった。だから——隔世遺伝というやつだろうなと、健はこの頃考えていた。まったく別の要因のことなど、考えもしなかった。
それはバイスロイも同じことで、彼が真のピアノに惹かれるのは叔母ソフィアの影を感じる、それ以上の要因があったなどと、想像もできなかったのだった。

真がレッスンに通い始めて三ヶ月が過ぎようとしていたが、その間、一度も途切れることがなかった。健は、ポルタアウレア公国の皇太子殿下はヒマなのかと思ったくらいだった。三ヶ月以上も本国を離れていることになるのだから。もっとも、殿下は真のレッスン日以外は本国へ帰っていて、レッスンのある週の中ごろはアデレード、というハードなスケジュールをこなしていた。そうまでして、彼は真のピアノにつきあっていたのだった。

175.

　よく晴れた春の夕暮れ。金曜日。真が言ってきた。「パパ、ドライブにつれてって」
「いいけど。テニスは？」
「きょうはパパとおはなししたい」

　――なんだなんだ、改まって、お話したい、だなんて――

　五歳の息子にどぎまぎしつつ、「どこへ行きたい？」
「海が見える、崖のうえの」
「……わかった」
　気まぐれからだろうが、またしぶいところを選ぶものである。真が言うのは国道一号線。またの名をプリンセスハイウェイという。

　アデレードからメルボルンを経由し、シドニーまで、海岸線を走る道路である。名前はすてきだが、ほぼなにもないといっていいロケーションが延々とつづく。いい点は、空いてて快適なドライブが楽しめるところだ。アデレード-メルボルン間は内陸の道路の方が距離は短く実用的である。

　話がしたいからドライブに連れてってほしいと言い出したのは真の方なのだが、ずっと黙ってフロントウィンドウ越しに海を眺めている。
春の夕陽にきらめくグレートオーストラリア湾の向こうは南極海。その先は南極。熱心に海を眺めている真はなにを考えているやら。しかし――真が眺めていたのは海ではなく、空だった。

「――パパ――」
「ん～？」
「――――」
「なに、どうした？」
「――来る」
「え？　なにが――」

　真はぐるっと頭を巡らせて体をシートの上でねじり、リアウィンドウの外を見た。目が見開かれ、口が半開きになり、手が動いて父親の左腕をつかんでいた。

　なにが、と聞き返すのも愚かだった。海岸線の高い崖の上を走るハイウェイの右後方から何か大きなものが迫ってくる気配を感じる。物質的圧迫感。大型のコンテナ車が追い越そうとしている感じに似ていたがサイドミラーには何も映っていない。
サイドミラーの向こう、高速で走るポルシェと平行して海岸線の下から白い物がゆっくり浮かび上がってきた。

目に映っているものが信じられない。

長く鋭い口ばし、小さな頭、細い首———左右に広がる長大な翼。

頭が少し動いて、涙型の紅い色の目が健の目と合った。ハイウェイのゆるい左カーブの手前で大きな白い翼竜は優雅に体を翻した。

　急ブレーキでタイヤが軋む。ハンドルを大きく切って車を道路の外、草地へ出し、そこへ止めてエンジンを切った。

　心臓がのど元までせりあがってどきどきと激しく鳴っている。新鮮な空気が欲しくて車の外へ出ると息子はもうそこで空を見上げていた。

「すっごーい——！！」うれしそうに歓声をあげている。「ねえ！　すごいお化けだった——！　あんなの初めてみた——！！」
「お化け？」健はあきれてオウム返しに言った。
「おじいちゃんとこで何度も見た、もっとちっちゃいやつ」

　おじいちゃんとこ、とは、母親のひろの実家のことだ。去年のお盆には母子で里帰りして日本の夏を楽しんできた。

「あんなお化け、いるもんか！！」桧山は思わず強い口調で言った。「お化けの方がまだマシだ！！　今のには実体があったじゃないか！！」
「な、なに怒ってんの！？」真はびっくりして父親をみあげる。
「ああ……いや……怒ってるんじゃない……」

繰り返し深呼吸する間も車に寄りかかっている。心が寄りどころを欲していた。
お化けの方がまだマシだ。幽霊を見、言葉を交わせる人間なら彼の身近にいる。

しかし、生きた翼竜を見たという人間はいない。
古生物学者をやってる友人は今でこそ地道に化石を掘っているが、何年か前には半生の翼竜の化石が見つかったという情報に飛びついてブラジルへ飛び、さらには本物を見たという情報に飛びついてアメリカへ渡った。それだけ熱心な研究者がいる一方で、自分のような門外漢が……という気持に襲われる。マックス・ペイリーはなんだってこういう時にゴビ砂漠なんかへ行ってるんだ！？

彼ははっきりと見た。
細い体を覆う真珠色の羽毛。そして紅い宝石のような目が笑っていた。今まさにそこにいる、生き物の、生きたエネルギー感。
彼がブレーキを踏んだのは、翼の羽ばたきに車があおられたからだった。
鳥のようだが鳥ではなかった。空へ舞いあがっていく異形のシルエットはぞっとするほど美しかった。

「パパ？」、と、真は心配そうに父親を見上げた。「ぼくはずっとパパといっしょだよ。約束したでしょ？」

176.

真は車中で興奮してしばらくはしゃいでいたが、やがてぐっすり眠ってしまった。きょうの真は、なんだかおかしいと健は思った。いつもの真とどこか違っていた。帰着しても起きないのでしかたなく助手席から引きずり出し、抱え上げて部屋まで運んだ。力尽きてベッドに放り出すことになったが、真が起きる気配はなく、熟睡したままだった。

こどもとはいえ、眠ってしまうと重い。やれやれ、と床にへたりこんでいると、ひろがやって来た。
息子の靴を脱がせながら、「おかえりなさい。真は車の中で寝ちゃったのね」
「うん」

「おつかれさま。帰っていきなりでわるいんだけど、《ミッドランタ》にみえてるお客様で、支配人にぜひ会いたいってひとがいるらしいの」
「オレに？」

*

　シャワーを浴びたかったが、会いたがっているというお客を待たせるわけにもいかない。顔だけ洗ってタキシードに着替え、出勤する。フロントのアイラが（いちばん奥の、お席の方です）、と教えてくれた。

　レストランのあちこちにろうそくが灯され、春の宵の暖かな空気に炎が揺れている。空気にはかすかに花の香りが混じっている。人工的な、香水の類ではないようだ。料理の邪魔にならないよう、香りのある花は飾らないようにしてあったはずだが、なんの匂いだろう。日本にいた頃、冬の終わりの梅の香りに胸が騒いだ、そんな記憶が立ち戻ってくる。

懐かしい故郷への憧れ。全身がうずくような、甘酸っぱい感傷。探して、探して、探し求めた人との、再会。

　ああ、と健は声にならないうめき声をあげた。

　会いたかった。この人に。

「ダーヴェ先生――」

177.

「ヒューダー――？」

　懐かしい声。懐かしい眼差し。懐かしい、手のひらの温もり。

　ヒューダーは、桧山 健と同じく、幼少時に両親を亡くした。語るもおぞましい、ある事件によって。事件を知って駆けつけたダーヴェを、幼いヒューダーは声を限りに責めた。「どうして！！　どうしてもっと早く、来てくれなかったんだ！！」

孤児となった彼を育てたのはダーヴェだった。ダーヴェはヒューダーの父であり、師でもあった。両親を亡くした悲嘆はやがて薄らいでいったが、ダーヴェが常に傍にいてくれたからだとヒューダーは考えていた。幼いこどもの感情まかせの罵倒をさえ、正面から受け止めてくれた人だった。

「先生――」

　支配人とお客が互いの首を抱くようにして涙にくれているのを見て、アイラはそっと後ずさりし、スタッフたちを退かせた。

＊

「本当に、あなたですか、ヒューダー、あなたが私を呼んでくれなければ、ぜんぜんわかりませんよ！」

「そうらしい」、とヒューダーは笑った。「なんでも、マミヤに合せて外見を造り替えられたとか」

「おお。マミヤ。彼女といっしょにいるのですね」

「呼んできましょう」、と立ち上がりかけたヒューダーを、ダーヴェは止めた。「待って」、と遠くを見る眼差しで。
「男の子が……目を覚まして、でも、眠そうだ。彼女は眠るよう、言い聞かせている。あれは……あなたたちの子？」

　ヒューダーはおどろいてうなずいた。

「いえ、ふっと、そんな情景が浮かんだんです。見ようとして見られるものじゃない。ご子息が眠ったら、彼女はここへやって来ます。そうだ、名刺を……」

　間宮ひろの実家で見た、アルベルト・フォン・ラウレンス氏の、あの名刺と同じものが、今、持ち主から健の手に渡った。

「ここ《ミッドランタ》の支配人がコウイチ・ヒヤマの息子であることはわかっていました。その人物こそが私のパートナーなのだということ、時が来なければ会えない、ということも。人と人との関係、物事の関係、さまざまな関係性が調整されて初めて私たちは出会うことが許される。ヒューダー、いえ、ケン、私はとても会いたかった。私の真のパートナーたる人物に」ダーヴェは、ははは、と笑った。「まるで、恋の告白ですね」

「お話ししたいことが、たくさんあります。ヒューダー、いえ、もう、ケンと呼びましょう。あなたの中にヒューダーがいて、私の中にダーヴェがいる。互いにそう知っているだけで十分のはず。
あなたに会わせたい人がいます。今宵、ここで待ち合わせをしているんです。もうすぐ到着するでしょう」

178.

　やがて、アイラが案内してきた『連れのお客さま』を見て、健はうんざりした。「バイスロイ！？」
「おや。ひさしぶり。どうしたんだ、タキシードなんぞ着込んで」
「オレはここの支配人だ！」

「あのう、ふたりは知り合い？」ラウレンス氏は額に手を当てて困惑した顔で言った。

「おお、ラウレンス先生！　知り合いも何も、我々は従兄弟どうし」
「え」
「嬉しそうだなバイスロイ」
「きみは嬉しくないのかね？　私はこんなにきみを愛しているというのに」

　この男に愛されても、さっぱり嬉しくないというのが健の本音である。

　ラウレンス氏はふたりを見比べて、「ふーん？」と神妙な顔をしている。

「ちょっと待って。すると――コウイチの奥さんは……公国の公女殿下だったと？　なるほどー。どうりで。気品といい、教養といい、美貌といい、ただのひとではないと思わせるものがありましたっけ」

「オレはその気品と教養を母から受け継いだのだ」
「私はその気品と教養と美貌をも叔母から受け継いだのだ」
「オレはドイツ人の祖母に似たんだ」
「なるほど、才能と外見は隔世遺伝であったか」

　どうしたってしょうもないことでいんしつな火花を散らさずにいられない二人である。

　ヒューダーとバイスロイがそういう相性なのは仕方がないが、ケンとエドミールの間がそういう関係なのだと知ってラウレンス氏はひそかに驚いた。

　ケンの母親＝エドミールの叔母＝ソフィア＝ポルタアウレア公国の元公女。ラウレンス氏は思わず言ってしまった。
「では、ケンとエドミールとは、血が繋がっている……？」

「そうなのだ、よりによって、こいつと！」
「そうなんだ、よりによって、こいつと！」

　二名は口を揃えて「こいつとはなんだ！！」、つかみ合いになりかけた。はからずも、双方で本音が出てしまったのであった。

「まあまあ。それはそれとしてですね、ごほん、話を始めさせていただきますよ。ふたりはすでにお知り合いとのことですが、改めて私から紹介いたしましょう。
ケン、彼、エドミール・アウレア氏はH＆L財団の芸術部門の責任者候補です。
エドミール、こちらのケン・ヒヤマ氏はH＆L財団における私のパートナー」

　はたして、ケン＆エドミールはあぜんと見合った。
「こいつが芸術部門の責任者！？」
「こいつがラウレンス先生のパートナー！？　では、H＆LのH！？」

「私の家業は領民を統治することだ。人口五千人の微々たる国家だが、君主たる者、国民に対して、そして、世界に対して、責任がある。
国民に対しては、端的にいって、平和な生活を保証することだ。そして世界に対しては国民を統べる者としての品格を示すことだ。それが代々受け継がれてきた大公家の家訓だ。私は幼少時からそのことを叩きこまれて育った。私の血と肉といってもいい」

善きにつけ悪しきにつけ、こういうところがバイスロイだと、健は思う。統治の面積や人数など関係なく、彼は魂からして頂点に立つ矜持の持ち主なのだ。

「だが」、と遠い目で続ける。「その信念が覆される事態が、私を襲った。そう、敬愛してやまぬ叔母、ソフィアの失踪だ。誰言うとなく、人は彼女をポルタアウレアの至宝、ポルタアウレアのバラと呼んだ。彼女はポルタアウレアの智と美だった。

当時、大公家直系の人間は三名しかいなかった。ソフィアもまた大きな責務を負っていた。にもかかわらず、それらをすべて投げうって失踪、男の元に走り、子を成した。

父は激怒し、私は……私は、彼女の苦しみを知っていた。言動の端々から、彼女がなにを考えているものか、感じることは可能だった。明確な言葉にしないだけに、それは彼女の根底にある苦しみだった。

大公家の人間にはいくつかの制約がある。たとえば、男女関係なく、自由な恋愛は許されない。彼女を苦しめていたのは、もしも、真実愛する異性に巡りあってしまったら自分はどうするのだろうという疑問だった。どう生きるかという疑問だったのだ。
結局、彼女は大公家を棄て、愛するひとを選んだ。

そうと知った時、私のなかでなにかが決定的に変わってしまったと、ケン、きみに話したのを覚えているだろうか。

むろん、私はショックを受けたが、それは私らを——すなわち国民を——棄てた身勝手さに対してではなく、そういう生き方ができるのだというひとつの回答に対してだったのだと、ようやく気がついた。ならば——私にも同じことができるかもしれない——

ラウレンス先生、貴方のお誘いはまことに私の心を揺るがした。なんとなれば、芸術に生きることは私の魂のまことの望みであるからだ。

しかし、かといって、国家のあるじである立場を投げ出すことはとうてい出来かねる。私が放棄したらば、跡を継ぐ者は完全にいなくなる。だからソフィアの子を懸命に探したのだ。探し出して、そいつに大公家を継がせようと。じっさい、現大公の甥、血筋は正当、どこからも文句の出ようがない。なんの問題もない。ところが、そいつとちゃんと知り合う前に、そいつの息子と知り合ってしまった」

　ラウレンス氏はふたりの顔を見比べた。「……と、いうと？」

「なんといっても、彼……ジュニアの方だ……は見た目、性格、価値観、どれをとっても、たいへん愛らしい。国民の上に立つ者として重要なファクターだ。年齢的に私の子としてもおかしくない。真こそ、未来の大公として理想的な存在だと、そう思った。そしてまたソフィアのピアノも、彼を拒むことなく受け入れた。いいことずくめではないか。彼はまさに大公家の人間だったのだ。

しかし——彼がピアノの弾き方を覚えるにつれ、私は衝撃と感動とで鳥肌がたった。
七歳のモーツァルトの演奏を聴いたゲーテは、その才能は絵画においてラファエロ、文学においてシェイクスピアに匹敵すると絶賛したという。そのことが頭に浮かんだ。まさにそれだと思った。真の音楽は稀に見る天賦の才だ。真はこの才能を生きるべきだ。だがそうすると——」

「大公家を継ぐ者がいなくなる」

「そうなのだ、ラウレンス先生。
教えてほしい。魂の声に忠実に生きるのはいい。だがこういう場合はどうなるのだ？」

「……それはH＆Lに対する問いですね」
　指先でメガネを押し上げるラウレンス氏に、健は声をかける。

「先生、オレの考えを言わせてもらっていいだろうか」

「どうぞ。聴かせてください」

「オレがH＆L財団の存在を知ったのは、六年前のこと。内部でどんなことが行われているのか、一時は探ってみようとしたができなかった。部外者ということで弾かれてしまう。ラウレンス先生と顔を合わせたのも今夜が初めてで、ほとんど何も話してない。だからオレの考えというのは、財団が公開している、誰でも得られる情報からのもので、まったくの部外者、素人の考えだ、ということを断っておく。

　家業と個人の才能、とは、わりとよくある問題なのではありませんか？　先生」

　健の問いにラウレンス氏はうなずいた。

「由緒ある職業、責任ある立場、それらと、個人の才能が相容れない場合。個人を含めてトラブルが起こるだろうと、容易に考えられる。場合によっては家業か個人か、あるいはどちらも潰れてしまうかもしれない。どちらにしても悲劇的なことだ。そういった悲劇を防ぐために、財団は支援対象者に十五歳から二十一歳までという年齢制限を設けている」

「その通りです、ケン。世の中には幼くしてたいへんな才能の片りんを表すこどもがいます。
エドミール、あなたのお話とはまったく無関係ですが、中にはこどものもつ才能を利用しようとする、または無視しようとする大人がいる。なにより大切なのは、こども自身の意志です。十五歳といえば己で意志できる年齢。本人の意志に反する支援は、たとえ親御さんがどんなに希望したとしても、財団は決して行うことはありません」

「エドミール、あなたの芸術を愛する心、その才能を見出す力、私はよく知っています。ゆえに財団においての統括者としてあなたを望むのです」

「真の問題であるだけでなく、私の問題であるということだな。なあ、ケン、君はどうなのだ？」

「オレ？　オレは自分の家業を継いで実業家になることしか考えずに生きてきた。H＆L財団創設者はオレの祖父、財団は家業のひとつだ。だから財団のために生きることに、なんの問題も迷いもない。妻のひろも承知の上だ」

「ふーん……」

「代々からの会社をいくつか継いだが、財団とオレ自身の関係を知ってからは、外部の後継者を育てた。いつでも旅立てるようにな。それと――真は、オレの跡を継がないだろう」

「Why?]

「真は……めっぽう、数字に弱い」

181.

　黒猫のバラムとスポッテッドのバランケ兄弟は《ミッドランタ》へやってきて五年経つ。「厨房とレストラン、お客様の部屋を出入りしてはダメ」という飼い主アイラの言葉を忠実に守り、もっぱら健一家の部屋を出入りしている。しかし今宵の宿泊客の部屋へ行こうとする健のあとをこっそりついてきて、お客様たちの膝の上へするりと乗ってしまった。
ラウレンス氏も、便乗して泊まることになったエドミール氏も、教えられないうちにネコたちをバラム、バランケと呼び、よろこんで受け入れている。
よしよし、と健は思った。大事なタキシードにネコの毛をつけられたくなかった。

　不思議な夜だ。健のホームで、ラウレンス氏とエドミールが膝を突き合せるようにして熱心に何事か語りあっている。どちらも財団の重鎮だ。すっかりリラックスしたネコたちは彼らの膝でごろごろと喉を鳴らしている。

　たしかに――妙な夜だ。空気は暖かく、かすかに芳香を含んでいる。それはこの地を覆う大気すべてに漂っているようだ。
香りは記憶をくすぐる。懐かしい故郷への憧れ。全身がうずくような、甘酸っぱい感傷。探して、探して、探し求めた人との、再会。

　再会

　ふいに、バラムが身じろぎし、ラウレンス氏の膝を飛び降り、テラスの外へ出て行った。バランケも耳を立て、バラムの後を追う。そして、二匹揃ってにゃあにゃあと鳴きだした。警戒している様子はない。何かに呼びかけているようだ。

「どうしたバラム」
　健は、中庭によそのネコでも来ているのかと思った。開け放たれたテラスの外は月明かり。ふと、誰かの視線を感じた。《ミッドランタ》は二棟あって、間に中庭をはさんでいる。その中庭の向こう、東の建物の上に、世にも奇妙な生き物が"止まって"いた。

長く鋭い口ばし、小さな頭、メカニカルな紅い流線形の目、細い首、細い体の両側には翼が折り畳まれている。満月を背景に、それの白い羽毛はさざ波のように輝いていた。

１５・「Princes Highway 」

１６・「Anbeleo Calendar 」へ続く

あとがき

本編のなかで、翼竜が走る車を追い越していく描写があります。『コッパとレル先生』（puboo公開は2021年）にも、成長したコッパが走る車と並んで飛ぶというシーンが。
描いた順からいくと、こちらのプリンセスハイウェイの方が先です。
プリンセスハイウェイが念頭にあって『コッパと～』を描いていたわけですが、いつかそこまでたどり着けたらいいなあと、夢物語のように思っていました。思えば遠くへきたもんだ。ちょっと感無量。
描写のなかで、『涙型の紅い目』というのがありますが、ケツァルコアトルスのくちばしの後ろの紅い色で表現されるあの部分は、頭骨を軽くするための空洞なのだそうで、ホントの（小さい）目はさらにその後ろにあります。しかしあの部分は目です（きっぱり）！

2025年5月10日　記

奥付

リ・コンストラクション　　第十五章　Princes Highway

2025年　5月16日初版発行

著者　　峯村　明　E-mail

表紙素材　　イラストAC

制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社